

## 加賀一向一揆の城館分布

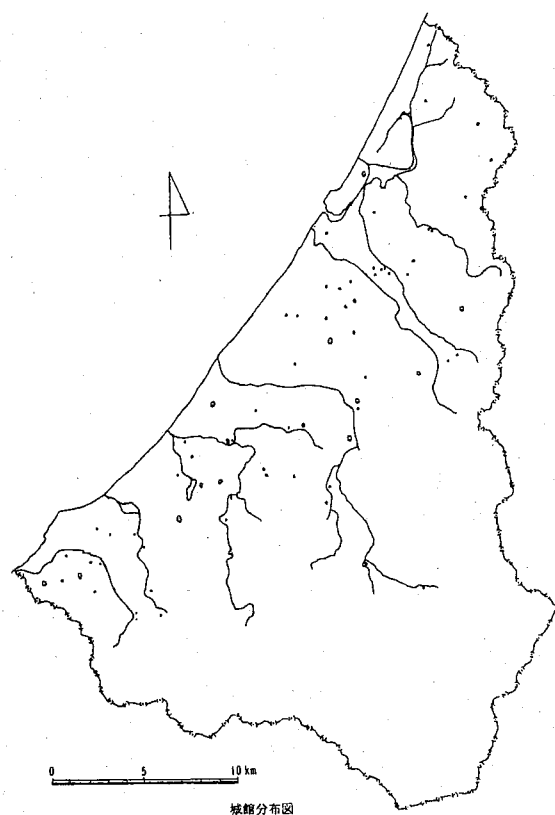
大西 裕子

中世城館の研究は、従来、表面観察や発掘調査といった個々の城館を対象としたものや地方史誌記述の一要素として使用されるものがほとんどであったが、近年、中世城館の編年や一般的特徴、更には個々の城館の配置と構造の面から戦国大名の領主支配の実態に迫ろうとする研究もなされている。

本稿の目的は、これまでその詳細な分布図が示されることのなかった加賀一向一揆の城館について、5 万分の 1 地形図上で詳細な位置や自然条件を確認、図示し、それをもとに戦国大名領国における城館分布との差異・特徴を明らかにすることであった。

調査にあたって、加賀の国が一向一揆の支配下にあった時期は、長享二（1488）年から天正十（1582）年まで約 100 年間の長期にわたるため、これを権力交代や外圧の変化によって長享二年～享禄四（1531）年、享禄四年～天正元（1573）年、天正元年～天正十年の三つの時期に分けて考察した。

長享二年～享禄四年においては、24 ケ所の城館のうち約 8 割がこの時期北陸蓮如教団の中心地であった若松本泉寺の位置する北加賀に集中しており、南加賀ではわずか 5 ケ所の城館が約 10 km もの距離を置いて



構築されていた。この10 kmという距離は、当時使用されていた法螺貝や太鼓、烽火などによる連絡が不可能な距離であり、そこからこの時期の加賀では、城館間の連携が希薄であったことが推測できる。

また、享禄四年～天正元年の時期は、城館の数の上では25ヶ所と長享二年～享禄四年の時期とほとんど変化が見られないものの、その分布状況は大きく変化し、北加賀と南加賀の城館数がほぼ同数となることが分かった。とくに朝倉氏の侵攻を受けた越前との国境地帯において城館が密に分布しており、連絡網の存在をうかがうことができる。ただしこの連絡網は、他地域との連絡が困難であり、加賀全体を覆うものではなかった。

天正元年～天正十年には、城館数がそれ以前の約2倍に増加し、白山山間部を除く加賀全体にまんべんなく分布するようになり、城館間の距離を測ると、9割の城館が約5 km以内の間隔で近接して立地し、加賀全体に法螺貝や烽火による連絡網が完成した。

以上三つの時期を通してみると、時代が下るにつれ城館同士の連絡関係が築かれていったことがわかる。しかし加賀一向一揆の城館には、一部を除いて本城―第1支城―第2支城という構造は認められず、支城網の発達には加賀国内でばらつきがあったと考えられる。

本研究では、加賀一向一揆の城館分布について戦国大名領国下のそれと比較しながら特徴を述べてきたが、これらはあくまで加賀国一向一揆の場合に限定される。よって一向一揆城館の分布の特徴を明らかにするために、他地域における調査が望まれる。